

総合学習におけるメディアセンターの果たす役割 —Dickson Schoolにおける「Foxfire」の教育実践より—

鳴門市立明神小学校 教諭 吉成悦子

(1) はじめに

日本では平成14年度から新教育課程の施行となり、小学校では総合的な学習の時間が、週あたり3時間設定された。しかしながら、平成12年度の移行期段階から、ほとんどの小・中学校で、時間数は多少異なるが実施してきている。また、総合学習についての実践研究校も多く、正式の施行前にすでに実践面でも議論され、問題点もいろいろと指摘される状態での新教育課程スタートとなった。

一方、総合学習で特に重要とされる活動方法に「調べ学習」がある。この活動をするときに欠かせないのが、メディアセンターの存在である（日本では、まだメディアセンターという段階には至らず、学校図書館とコンピュータ室を組み合わせたものがそれに相当する）。けれども、その活用において日本は、まだまだ立ち後れているといっても過言ではない。

今回、GPSでアメリカの小学校に派遣されるにあたって、私が研究テーマに選んだことは、「総合学習におけるメディアセンターの果たす役割」である。このテーマを追究することによって、現在の日本の総合学習における問題点の解決についての一考察としたい。

(2) 研究の概要

① 研究の目的

学校図書館の運営において、アメリカは日本よりも先進国である。読書センターとしてはもとより、学習・情報センターとしても以前から子どもたちの学習に活用されていると聞いている。

日本でも、新教育課程の実施にともない、総合学習において学校図書館での調べ学習は不可欠なものとなった。日本において学校図書館の資料や運営面での一層の充実が急がれているが、実態はまだ十分とはいえず、地域や学校による格差が非常に大きい。

そこで、モデルとして、ノースカロライナの小学校 Isaac Dickson Elementary School(以下 Dickson School とする)におけるメディアセンターの実際の活用・運営について見聞したことをまとめていきたい。

そして、Dickson SchoolのMagnet Theme(特色)である「Foxfire Core Practices」(子どもたちの体験学習を重視しながら自らの生活に根付く課題解決学習)にメディアセンターがどう貢献しているかについて明らかにしていきたい。それによって、日本の総合学習の時間により活用できる学校図書館のめざす方向を見いだしていきたい。

② 研究方法

以下の3つの段階を経て、研究テーマにせまる。

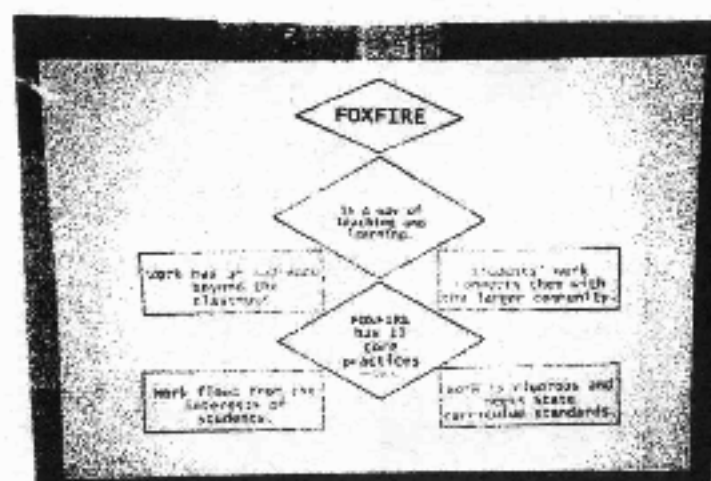
1. Dickson Schoolの「Foxfire」とは何か。
 - ・学校長Dr. Dineenより説明を聞く。
 - ・Dickson Schoolのホームページより調べる。
2. 「Foxfire」の単元の展開例を調べる。
 - ・4年「Ocean」(海)
 - ・5年「the Western Hemisphere」(西半球)
3. メディアセンターの果たす役割について考察する。
 - ・専任学校司書(Ms. Hayes)の仕事
 - ・「Foxfire」の単元との関わり
 - ・機関紙「PANTHERPAWS」の編集

(3) 研究結果と考察

1 Dickson Schoolの「Foxfire」について

Dickson Schoolの玄関を入ったところに、「Foxfire」について書かれたボードが掲げられている。来校者にはすぐ目に付くところに置いてある。

さらに、私がDickson Schoolに初めて訪問した日に、校長先生とお会いして、最初に聞いた学校の特色がこの「Foxfire」であった。子どもたちの生活から出発し



学校の玄関に掲げているボード

て、子どもたちの生活に根ざす教育であり、子どもたちの五感をもちい、教師は子どもと共に作っていく教育方法であることを強調されていた。アメリカ全土に普及している方法であり、「Foxfire」のホームページには詳しく紹介されている。

「Foxfire」は、教え方と学び方の方法であり、「Foxfire」には、11の Core Practices (活動内容) がある。11の Core Practices (活動内容) は、「Foxfire」を進めていく上での骨組みである。概要をまとめると、次のようになる (詳しくは、参考資料1参照)。

「Foxfire」の学習は学習者の関心から出発し、教師と学習者が共に学習計画、学習方法の選択、改善を図っていく。活動を重視し、教室を越えて地域や世界ともつながっていく。学習したことは、個人やグループにとどめずに広く知らせていく。そして、進行中であっても評価をしていく必要がある。この学習を通して、学習を進めていく能力 (スキル)、すなわち問題解決をしていく力 (生きる力) を得ていくであろう。

こうまとめていくと、日本で現在進めている「総合学習」とたいへんよく似ていることがわかる。

2 「Foxfire」の単元の展開例

4年「Ocean」(海)の実践例

ア 担任 (Ms. Donalyn Rechberger) の話より

4年生は、3つのクラスとも9月に「大西洋」へ臨海合宿に行く計画がある。そこで、「海」というテーマで各人が課題をもち、2ヶ月かけて学習している。

教室には、「海」に関する図書や資料を並べて、関心を喚起している。「海」から思い起こすものをリストであげていき、本・資料・CD・インターネット・イン



タビューなど子どもたちがそれぞれリサーチをして準備する。臨海合宿中、終わった後も継続してリサーチを行い、調べたことをグラフ・日誌・地図・小冊子など絵と言葉で表す。エキスパート・プロジェクトと呼ばれ、親や全校生が見ている前で発表をする。

このプロジェクトで、子どもたちは五感を使って学び方を身につけていく。「Foxfire」での問題点は、意欲のない子や学力の低い子にどうサポートをしていくか、その子にどんな情報を与えていくとよいか試行していくこと。担任教師だけでなく図書館の先生、保護者もそれに関わってサポートする。

イ 教室環境

教室に「海」に関する本を集めて展示している。

ウ 個人の課題

一人一人が課題をもって、調べ学習をしている。

本、ポスター、グラフ、地図など多様な資料を用いている。この段階で、メディアセンターの資料を用いて学習が展開されていることがわかる。

(個人の課題をまとめたガイド)

Expert Project Guide

JESS: Recreational Activities at the Beach

- "How To" Book on Kiteskating

- Collage on Basic Beach Recreation (include cut-outs, drawings and label each).
- "Fun Facts" Brochure on popular cities.

ERIC: Crabs and Crustaceans

- Poster of crab and crustacean labeling main body parts. Compare and contrast each with words at the bottom of poster.
- Small book entitled "Fascinating Facts about Crabs and Crustaceans"

SEQUOIA: Beach Weather

- "Weird Weather" book. Write one fact per page, include picture.
- Graph on hurricanes, tornadoes etc. How many and where do they occur?
- Poster on cyclones, hurricanes, tsunamis etc. Include caption-explaining difference between each.

ROWAN: Whales

- Body part poster of a whale labeling each part
- World Map - label where different whales are found.

これがあと4ページ続く……

(10月1日に4年生の担任より送られてきたeメール)

We went our trip to the Atlantic Ocean. The children learned a lot about the sea, the sound,

freshwater ponds and the maritime forest. They also dissected a squid.

Our Expert Projects (for our Foxfire theme) are almost complete. Kids are working on individual topics relating to the ocean. A lot of the information they researched will be displayed in the form of art. They will present the projects this Friday.

(私たちは、大西洋への小旅行に行ってきました。子どもたちは海や波、淡水湖、海岸沿いの森について多くを学びました。彼らはまたスミイカを解剖しました。

私たちのExpert Projectsは完成に近づいてきました。子どもたちは、海に関係した個人の課題について学習を続けています。子どもたちが研究したたくさんの情報は、アートの形にして表現しています。今週の金曜日に、私たちは発表会をする予定です。)

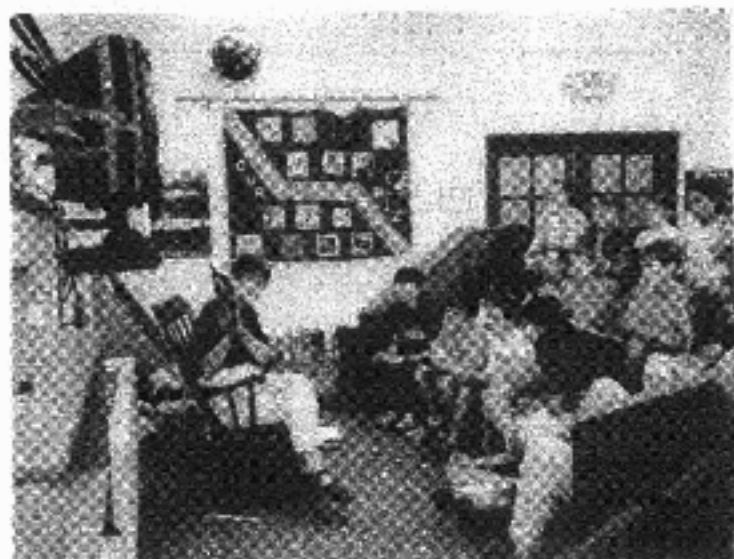
5年「the Western Hemisphere」(西半球)の実践例

A 授業参観をして

訪問中の8月22日に、5年生のクラスがメディアセンターで授業をしているのを幸いにも参観することができた。

そのときの指導者は、メディアセンターの専任学校司書であるヘイズ先生であった。学級担任の先生は、子どもたちと一緒にヘイズ先生の話聞き入っていた。本時は、「Foxfire」の導入の授業であり、事前に担任のMrs. Castelloeとは打ち合わせをしており、the Native Americansに関する民話の読み聞かせから子どもたちに興味を持たせる授業であった。同じ民話でも違う作者によって描かれた絵本を2冊用意して、読み比べしていた。それによって、同じ伝説であっても、立場によって描かれ方が違うことに気づかせていることに驚いた。

エスキモー民族について、地図を用いて場所を教え、



(各自が自分の関心のある本を決めて読み始める)

ヘイズ先生が自ら赴き撮影した写真や集めた服装、文化を表すトーテムポールなどさまざまな資料を提示していた。

後で、インタビューをしてわかったことであるが、ヘイズ先生はたくさんの資料を収集して、単元の見通しをきちんと持って授業に臨んでいるということ。「the Native Americans」についての絵本を30冊以上準備していたことにも敬服した。

これ以後の、学習計画についてeメールで問い合わせたところ、次のような返信があった。

Mrs. Castelloe's class began studying the Western Hemisphere by learning about the Native Americans.

We used folklore as the beginning part of the lesson because so much of Native American history is told through stories of nature and creation.

They had to complete four or more study sheets about different Native American literature. This took 3 weeks to complete.

Then we worked together to do a research project on all Native Americans of North, Central and South America. This project took about 2 weeks.

The students made posters did Power point

computer presentations and made artifacts from the various tribes.

Now they are beginning to read historical fiction and moving into the histories of the continents.

2つの実践例を通して

これらの「Foxfire」の実践例からわかるように、メディアセンターは、学習の場そのものであり、資料や情報を提供するセンターとして不可欠なものとなっている。

4年生の「Ocean」の単元では、海へ行く前に自分自身の興味にそってメディアセンターで本やポスター、図鑑類で調べ学習を十分にしている。そのうえに、自らの体験を重ね合わせて、感じたことやわかったことを作品に表している。

また、5年生の「西半球」の単元では、民話や歴史の本、地理の本などをたくさん読んでいくことで自分のまたはグループの課題を解決していている。ここでは、一人一人が読んでいきたい本が十分に揃えられていることが必要である。本だけでは、子どもたちの関心を深めていくことは難しい。多様な資料や実物を用意して提示することもメディアセンターの教師がしていることに注目したい。

3 メディアセンターの果たす役割

●専任学校司書ヘイズ先生の仕事

私が学校図書館に関心があることを伝えると、ヘイズ先生は、約1時間かけて館内を回り、メディアセンターについてていねいに説明をしてくださった。

ヘイズ先生は、一日中メディアセンターにいて、いつでも子どもたちが来館したときに対応できている。



開館時間は7:45~15:30であるが、他の先生が帰った後も、たいてい17:00ぐらいまで学校に残り、仕事をしているということだった。

仕事内容は、全校の子どもたちを対象に、図書の貸し出し・レファレンス・読書指導・授業の準備・授業・パソコンの管理・インターネット検索の指導・機関紙の編集発行などさまざまである。

閲覧室の横に広い事務室があり、仕事がしやすくなっている。給湯設備もあり、うらやましく感じた。

●「Foxfire」の単元との関わり

これについては、前の項で述べているので重複はさげ、感想にとどめたい。

私が参観した5年生の授業は、ヘイズ先生が全面的に関わり、展開されていた。担任の先生と打ち合わせを十分に行い、個々に応じた対応ができるように準備をしていることに感心した。専任の学校司書ならではの仕事であり、直接子どもたちと授業を通して関わるといことも貴重であると思った。

日本でも、すべての小学校に学校司書をおき、総合学習に対応できるよう支援をしてほしいと強く思った。

●機関紙「PANTHER PAWS」の編集

メディアセンターの入り口のカウンター横に学校新聞の「PANTHER PAWS」が置いてある。誰でも自由にもらえるようになっているので、私も2002年の春号と夏号をいただいた。

この編集は、全校の先生方に協力してもらい、放課



夏号2002「PANTHER PAWS」

後手伝ってくれる子どもたちと一緒にヘイズ先生があたる。Kから5年生のすべてのクラスから子どもたちの原稿を募集し、挿し絵も入れながら、8ページにわたる立派な新聞である。

● Computer Lab (コンピュータ室) の活用

メディアセンターの隣に30台のコンピュータが設置された部屋がある。私が参観したのは1-2年生のクラスが、コンピュータを使って算数の授業をしていた。この部屋では、コンピュータの使い方を学び、教科の授業を行っていた。

調べ学習にパソコンを使うときは、メディアセンターのコンピュータを利用していることもわかった。

(4) 学校図書館の問題点と今後の課題

アメリカの小学校のメディアセンターを実際に見聞して、改めてメディアセンターの重要性を強く感じた。Dickson Schoolは特別な学校ではない。アッシュビル市の中心にある公立小学校で、ノースカロライナの平

均的な学校と思われる。

メディアセンターに専任の先生がいて、その仕事ぶりは充実している。ヘイズ先生を見ていて、その仕事に誇りを持たれていることを感じた。

日本の学校図書館も、少しずつ改善されてきている。しかし、司書教諭や学校司書の配置は、全国的にすべての学校に配置が実現するまでには至っていない。学校図書館を活性化し、総合学習の関わりにおいて支援センターとするためには、学校司書の配置は、ぜひともしていただきたいことである。

そして、総合学習の内容について、日米の小学校で交流し、比較・情報の交換をすることで学び合えることがあるように思える。たとえば、4年の「海」では、鳴門の海について調べたことを紹介したり、5年の「西半球」の少数民族の単元では、日本のアイヌ民族について調べたことを伝えたりできたら、すばらしいのではないかと考えている。

「The Foxfire Core Practices」 (Isaac Dickson Elementary School)

訳：Kyoko Muecke

フォクスファイアーの中心的活動

1. 教師と生徒が一体となっで行なうこの活動は、作業の初めから、学習者による選択、計画、および修正で行われることが奨励されている。学習の中心課題は、学習者の興味や関心から選ばれる。教室内で生じる問題は、生徒同士が協力して解決し、教師は、学習者が問題解決に必要な力をつけられるよう、また責任を自覚するように援助する。
2. 教師は、学習者の便宜を計り、共同で作業を進める。教師は学習者の発達に必要なものを見定め、それを補足してやる責任がある。また、方向性を示すこと、学術的に秀でている部分を確認すること、学習者の知的、社会的発達を見守ること、新たな理解や自信をもたせることなどにも責任がある。
3. この学習活動は、教師と学習者が共に関わって初めて成り立つものである。学習者は、どのような技術が求められているのか、学ぶべき学習内容は何かをよく理解する。教師と学習者が、計画から遂行までを共に行なうことで、学習者は作業に従事し要求されている内容を達成することができる。更に教師は、学習者がこの活動を通して学んだことを、別の教科へと関連させることができるように指導する。
4. この学習の特徴は、学習者が実際に活動する点にある。学習者は、学習過程、問題提起とその解決、意味付け、作品製作、知識の獲得等の事柄に従事して行く。これらの活動を行う際、学習者は能力の限界に望むこととなるので、失敗や間違いをしても構わないということ、それらが次のステップになるということを知らされる必要がある。
5. 教室での活動は、生徒が互いに教えあうこと、小グループで活動すること、共同で作業することが大切である。教室の全ての生徒が参加し、かつ必要とされなければならない。どの生徒がどの部分に貢献したのか、その点が明確となるようにする。
6. 教室での学習内容が、地域や地域を越えた世界といかに関連しているのか、その点を明確にする。学習内容は、学習者が生活する地域と関連している必要がある。
7. 学習発表を行う。学習者は、もう一人の個人、あるいは小グループや地域の人々に、発表内容を見てもらう。観る側は、学習内容の重要性やその意義に対して肯定的な態度をとる。
8. 新しい活動は、過去の学習内容と連帯させ、技術や理解に幅をもたせながら、緩やかに螺旋状に伸ばしていく。活動の終了がそれで完結してしまうのではなく、新たなシリーズの出発点となるように留意する。
9. 学習活動の締め括りには、想像力と創造性が鼓舞される。学習者は、表現や調査、観察や吟味の仕方を自由に行い、審美眼の基礎を見つけ出す。これらの体験により、学習者は学ぶ喜びや達成感を味わい、物事への深い理解や、更なる知識への欲求へと導かれる。
10. 作業を進めるに当たり必要不可欠なことは、考察である。教師と学習者は、作業の内容およびその過程に関し、真摯熟考する。この活動を通して、洞察力が生まれ、修正や精練ができるようになる。
11. 教室学習者は、共に、厳密な査定と評価を行う。教授した内容及び学習した内容を表示するために、変化に富んだ方法を編み出す。

(参考資料2)

日米メディアセンターの比較 (Dickson Schoolと鳴門市明神小学校)

項 目	Dickson School	明 神 小 学 校
学 校 図 書 館 の 運 営 に つ い て		
・開館時間	7:45～15:30 (17:00)	業間・昼休み 授業で使うとき
・位 置	玄関に入ってすぐ 1階中央	職員室横 校舎中央
・広 さ	閲覧室 (200m ²) 事務室 (100m ²)	閲覧室 (80m ²) 事務室 なし
・司書教諭、学校司書の存在	大学で図書館学と情報科学を専攻した専任の学校図書館員が常勤	いない 図書館教育主任が事務にあたる
・児童の委員会活動	していない	5・6年生が当番で活動している
・諮問委員会	管理職・教員・保護者による運営に関する諮問委員会をもっている	保護者のボランティア活動を今年度より始める
・学校図書館主催の行事	9月と4月の年2回、読書週間にちなんで大きな行事を催している。クイズ大会をしたり、質問に答えたりする。ブックフェアでの収益は、学校とメディアセンターへ寄贈される。	毎月1回、休み時間にボランティアによるおはなし会を開催。 秋の読書週間には、図書委員会による読書集会を開く。
・資料の収集	Follett Library Automation Systemから資料データを得る。	図書主任に任される
・資料(図書)の分類と配列	デューイ十進法 シアース主題見出し	日本十進分類法による配列
・図書以外の資料 (新聞、パンフレット)の活用	新聞、雑誌の定期購読 資料の整理 本の購入のための参考にする	子ども新聞の購読・掲示 パンフレットの収集
・PCの導入状況 (インターネット検索、貸し出し事務)	自分のパスワードを使って、自由にインターネット検索をすることができる(10台くらい設置)。貸し出し事務は、本についているバーコードと個人カードを読み取って行っている。	現在、PCは導入されていないが、2003年には、本をバーコードで管理できると同時に、市内の学校図書館や公立図書館とネットワーク化される予定である。
・経 費	子ども一人あたり10ドル以上支給。 学校ごとの水準がある。	市費より年間8万円くらい PTA図書費として8万5千円
・機 関 紙	・季刊の機関紙を発行 「PANTHER PAWS」という学校新聞	・学期に1回 図書日より発行
学 校 図 書 館 利 用 指 導 と 読 書 指 導 に つ い て		
・図書館教育の年間計画	学年ごとに段階をおって、推薦図書があり、読後に理解できているかどうかのテストがある。たくさん読むとポイントが加えられる。担任の教師が評価を行う。	学級指導に図書館の利用指導が位置づけられ、担任教師が行う。推薦図書による読書を指導は図書主任の教師が示し、読書カードの記録で個人の評価を行う。
・読書指導の方法 (ストーリーテリング、ブックトーク、読書郵便、読書記録など)	それらをすべて行っている。それに加えて、異学年でグループやペアでの読書活動、カセットテープによる本の読み聞かせと後について読む方法の導入など	学校全体での取り組みと担任教師による読書指導がある。 多く読んだ児童には賞状を与えて賞賛する。

グローバル・パートナーシップの展開 ーラグビーミドルスクールの4日間ー

鳴門市第二中学校 校長 阿部 要

RUGBY中学校 第1日目

全校集会、1. ショーン進行 2. ドルトン校長あいさつ 3. 私のあいさつ

「ラグビーミドルスクールの皆さん こんにちは。私は皆さんとお会いできてたいへんうれしいです。私は、鳴門市第二中学校の校長で阿部要と申します。日本からやってきました。一昨年はノリス先生とクリスティー先生が本校に来てくれました。昨年は本校の高木悦子先生がラグビーへ来て習字やたこ焼きなどの授業をしました。そして、6月にラグビーのショーン・パーカー先生が二中へ来てくれました。生徒たちはたいへん喜んでいました。その時、二中の生徒が『チェーン』を教えました。とても上手にマスターしておりました。ショーンやってみてください。(ショーンはできなかった。打合せのときは大丈夫と言ったように思ったのだが。)

今、新学期が始まって、皆さんもファイトいっぱいのところでしょうが、私は、そうした皆さんの様子をもっと知りたくてやってきました。私の学校は、今、夏休み中です。9月2日から二学期が始まります。生徒は341名、教師は25名です。生徒たち全員から習字の作品を預かってきました。日本語ですが、読み方や意味は左に書いてあります。また、見ておいてください。4日間いろいろ教えてください。」

校舎案内 (ドン・ダルトン校長)

生徒数 6年生：245名 7年生：295名
8年生：278名 合計：818名

出欠確認はホームルームで

授業時間 必修教科 65分

実技教科 45分

休憩時間 3分

始業 午前 7:55

） (30分間の昼食タイム)

終業 午後 2:55

ラグビーのカフェテリアで昼食

久しぶりに学校らしい賑やかさに遭遇した感じ。休み時間は3分しかないので、ほとんど急いで教室移動のために使われる。そのため校内は非常に静かである。

優秀クラスの見学 (8年生 11名 男3人 女8名)

「昨日宿題に出してあった。雑誌についての討議をします。意見を言ってください。」と言う切り出しでの授業の開始であった。

①α, β, γ型の女性について

②人気について

③女性の進出について

④レッテルを張るということについて

さすがに優秀クラスである。意見が途切れないし、自分の考えを持っており、それが表現できている。答える内容も深い。指導の先生のコーディネートもいい。これぞディベートだという感じであった。

今、日本の教育に要求されている一つに、表現能力の育成が揚げられている。しかし、仲間と同じでなければ安心できないという感情が強すぎるのか、することがみんな同じで個人の考えが希薄のように思う。携帯電話、ルーズソックス、男子のシャツ出しルック、だらしないズボン。これらを個性と思っているように見える。もっと自分の考え方を主張してもらいたい。

自閉症のクラスの見学

5名を2人の先生が見ていた。かなりの重度で、子どもたちに話しかけられそうもなかった。指導器具はたいへん充実していた。

オープンスクール

少し道に迷って18:45ころ学校に着いた。既に駐車場は満車状態であった。体育館いっぱい、生徒・保護者が集合していた。国歌演奏のあと、学校長の経営説明、その後担任の紹介があった。ショーンのところで思わぬ拍手があった。(あとで分かったことだがショーンの授業はとっても楽しい。つまりラグビーの

人気教師である。そのことが拍手につながったのだと思う。)

オープンスクールは、日本のPTA総会に当たるのだろう。参観授業はやらないのかと訪ねると、教師はあまり見られるのは歓迎しないそうである。その後は各所で教師と保護者がいろんなところで立ち話をしていた。新入生は教室で全体に話をしていた。

RUGBYで2日目

プロイソン先生の教室での授業

始業時間の初めに校内放送があり、全員起立して胸に手を当て国家に忠誠を誓っていた。さすがに愛国心の強い国である。

<授業の流れ>

- Hello
- My name is K. Abe, principal of 鳴門第二中学校, 徳島, Japan.
- 鳴門第二中学校 and Rugby M.S. signed the agreement to be partners.
- 鳴門第二中学校 students want to meet you and be friends with you.
- Let's exchange letters and e-mails.
- Now, I'll show you a video to introduce Naruto-City. —15分—
- Any comment?
- Now, This is a recorder made of bamboo.
- It is called 尺八
- 「尺」 is an old unit of length and 「八」 is eight.
- So, it means eight shaku-long.
- That's how it got the name.
- This is 着物 for men. 生徒に着せてやる。
- This is はかま trousers.
- In 尺八コンサート、We perform with these outfits.
- Usually 琴 (a Japanese harp) 三味線 (three sting guitar) accompany 尺八.
- This is a score for 尺八.
- Please listen to me. † 5分
- There is a simple 「尺八」 (塩化ビニルで作った尺八、音は本物とほとんど同じ4本)
- Please try.
- There are my student works, Chinese letters 漢字.
- There are pronunciation of chinese letters.

- It's meaning in English and student name are written on the left.

二中より持ってきた習字をプレゼントした。それぞれが手にした漢字を比べあった。その他、あまった時間を質問の時間にした。何色が好きか。ペットを飼っているか。子どもはいるのか。日本で盛んなスポーツは何か。など、そういえば、ショーンが日本に来ていたときも同じような質問をしていたように思う。年齢が同じだとよく似たことを考えるものだなと思った。

ベギー先生の教室で、同じような展開の授業を行った。教室の後ろで、ずっと座っている人がいた。てっきり先生と思っていたが新聞記者であった。この授業が翌日の新聞で紹介された。



RUGBYで3日目 通訳のいない日、授業参観の日 ショーンの授業 (健康)

消化と吸収や呼吸器の話のようである。

好き嫌いなくいろいろな食物をとらないとトイレでたいへんである。そんな内容の授業を実際におもしろくやっている。どこの子どもも「うんこ」の話はたいへんおもしろがるようだ。生徒は、笑いっぱなしである。時々私の顔を覗いて、私が笑っているかどうかを確かめようとする。ショーンの人気の秘密を見た思いである。

「技術」(木工)の授業参観

参観のお礼に扇子をプレゼントしたら、お返しにハンディータイプのまな板をくれた。

「美術」(art)の授業

生徒たちにツルのおり方を教えた。生徒は24人いた

が全員がツルを完成できた。アメリカに来る前に折り方を特訓してきた甲斐があった。

体育の授業見学 (フットボール)

体育教官室に2名の男子教員がいた。そのうちの一人が大きな声で歓迎してくれた。さすが体育の先生であるなと思った。体育館でストレッチをした後運動場へ出てフットボールをした。45分しかないので実技はあっという間に終わってしまう。

今のNCの教育は学力を鍛えることに主眼がおかれている。主要教科は65分だが、実技教科は45分と削られている。体育の教官がぼやいていた。

RUGBYで4日目 (ラグビーの最後日)

今日も霧、昨日ほど濃くはない。

事務所にショーンが来ていない。通訳も10時半くらいに来るそうだ。だからそれまで自由にしてくれということであった。

通訳がいれば教頭先生にいろいろ質問したいことがあるのだが。

それまで、校舎内の掲示物の写真を撮って回った。

「家庭科」(Life skill)の時間の見学

昨日見学に行ったとき、テストをしていて授業が見えなかったのがその代わりの方である。クッキーを焼いていた。生徒が2つくれた。味はお世辞にもうまいと言えなかったが、生徒たちの笑顔がよかった。

カーシー先生(「言語」の先生)の教室で

日本とアメリカの共通点と違いについての授業であった。

いろいろと質問された。

日本の文字というところで、「自分の名前を書いてくれ」ということになった。白板にカタカナで書いてやると「我も」「我も」と手が挙がった。結局全員の名前を書くことになった。それぞれ自分のノートにそのカタカナを写していた。日本の文字に興味があるのだろう。ここでも、持ってきた習字をプレゼントした。たいへん喜んでくれた。

スペシャルクラス(障害児学級)の授業参観と授業

男子2名 女子2名(内1名は黒人で耳が聞こえない—そのため手話通訳者がついてる。)

最初、ふだんの授業の様子を見せてくれた。

「シンプルセンテンスについて」であった。

〈私への質問〉

「とがった建物はありますか？」

塔や寺院のことを言っているのだろうか。

耳の不自由な黒人の女の子が、「私は以前中国に行ったことがあるので、漢字を知っているということで黒板に「門」や「人」を書いてくれた。そこで、漢字について話をした。[山][川]などは形からできていることなどを話した。担任が一番うなづいていたように思う。日本の「家」や「着物」などを絵を書いて説明した。

手話通訳者が、「私のように手話通訳がついた授業が日本あるか」と言うので、「日本では耳とか、目の不自由な人はそれなりの施設へ行くので普通の学校ではない。」と答えた。あっという間の時間の経過であった。

フットボールの練習の見学50名くらいの部員の中で3人の教師が指導していた。

ショーンも指導者の一人である。なかなか激しい練習がくり返されていた。

ドン・ダルトン校長と最後の話

いろいろと聞きたいことがあったが、いざとなるとどれほども聞くことができなかった。4日間のお礼を言って別れた。最後まで明るく元気いっぱいの校長であった。

ラグビーでの4日間は、私が今までに経験した研修の中でも最高に大変な研修であった。しかし、また、最高に感動的研修でもあった。英語の分からない私にとっては精神的に、これほど緊張した研修もなかったが、これほど人間のすばらしさを体験した研修もなかった。

国際理解教育は、いかに本音で語り合える機会や環境を作るかにあるように思う。せっかくの姉妹校である。メールの交換もいいが、できれば生徒どうしの交流ができればと願う。子どもは私以上に友だちを作るのが上手だろうと思うから。

グローバル・パートナーシップの展開

―校則に見られる日本とアメリカの教育観の違い―

鳴門市第二中学校 校長 阿部 要

1 はじめに

本校は、平成12年度より米国ノースカロライナ州のラグビー中学校と交流を続けてきた。こうした交流をさらに継続・発展させるために平成13年度姉妹校協定を結んだ。姉妹校の実態を知るために本年度は、私がGPSに参加させてもらった。

800人規模の学校で冷暖房完備、送迎はスクールバスか保護者の車、服装は自由、4学期制で登校すべき日数が177日（日本は、197日）など、制度的にも環境的にも違いは大きい。その精神（子どもらしさ、中学生らしさ、人間らしさ）においては日本も、アメリカも同じであるという印象を強くしたラグビーミドルスクールの4日間であった。

ところで、ラグビーの校長よりいろいろとみやげをいただいたが、その中に、生徒向けのハンドブックがあった。A4版、104ページで、校長からのメッセージから始まって、学校規則、ノートの使い方、教科の重要ポイントが書かれており、後はダイアリーになっている。自由な書き込みができるようになっている。

その中の学校規則の内容を分析しながら日米の教育観の違いを比較してみることにした。

2 生徒の服装

服装規定については、日本の場合、どの学校も結構細かい規定があるものである。全く自由に見えるラグビーにおいて規定などあるのだろうかと思いきや、

「生徒はいつの場合でもいい恰好をしたがるものです。気が散ったり、混乱を招いたり、学校の品位を損なうドレスやヘアスタイルはいけません。アルコールやたばこや淫らでいかがわしいプリントがなされているシャツはだめ。靴はいつも履きなさい。帽子やバンダナは必要ない。上半身裸、ホルタートップ、タンクトップ、カットオフトップ、シースルー、ヘッドバンド、手袋、サングラスはだめ。ショーツやスカートやドレスは学校にふさわしいものにしなさい。ズボンやウェストのレベルまでで、ベルトはしなさい。教育を混乱させるような服装やアクセサリはだめ。」

結構細かい規定である。「教育を混乱させるような服装とはどんなものなのかわかりにくい。本校の「中学生らしい服装」と同じ意味だろう。

3 生徒の行動

生徒の行動面では「学校においては行儀よくしなさい。学校の文化的レベルは生徒集団の行為で判断される。だから、それぞれの生徒は、学校の全体的印象において個人として責任があります。」こうした言い廻しはアメリカ的でおもしろい。具体的には「口笛や手拍子、どんちゃん騒ぎ、授業中の私語はだめ、集会のときは財布は体育館へもっていきなさい。」など、たいへん行き届いた注意が書かれている。

スクールバスの乗り方、「教室と同じようにしなさい。バスの中では食べたり飲んだりしてはいけない。頭や手を出すな。運転手は座席を割り当てる権限を持っている。」運転手の権限を記しているのがおもしろい。

カフェテリアでの過ごし方、「ゴミはきちんとゴミ箱へ、床を汚さないように、食べ物、飲み物をカフェテリアから持ち出してはいけない。キッチンとできないときは隅のほうに連れていかれます。」必ず、罰則規定が示されているところがおもしろい。

また、「火事や竜巻に備えての基本的なルール、いわゆる避難経路や避難の態度」が記されていたが、竜巻というところがアメリカ的である。

さて、このハンドブックにおいて、日本とアメリカのもっとも大きな違いは次のことである。権利と義務が対の形で示されていた。

(権利)

- ①生徒は、自由と公的な教育を受ける権利をもっている。
- ②生徒は、学ぶ権利をもっている。
- ③生徒は、学校では個人として安全が保障されている。

(義務)

- ①生徒は時間どおりに学習の準備をして学校へ行かなければならない。
- ②他の生徒の学ぶ権利を侵してはならない。
- ③他人を脅かすような行為をしてはならない。

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| ⑧生徒は薬物に影響され
ない体と安全に学ぶ権利
を有する。 | ⑧ドラッグやアルコール
等の所持に関する法に従
う義務を負う。 |
|-------------------------------------|---------------------------------------|

など9項目が例示されていた。さすがに民主主義の発祥の国である。日本においては、権利や義務についてはよく口にしますが指導上都合のいいときに使っている場合が多いような気がする。あなたにはこうした権利があります。でも、こうした義務もあるのでしっかり果たしなさいと指導しているのだろう。

4

①懲罰室

生徒の行動においては日本とほとんど変わらないかそれ以上の細かいルールが設定されている。そうしたルールが守れない生徒に対しても、罰則規定が、これも大変詳しく規定されている。「違反行為があれば、3時から3時半（放課後）か7時から7時半（始業前）に懲罰室で報告書を作成しなければならない。両親には送り迎えの手はずを整えるために前もって連絡する。宿題ができていないときは火曜日の午後2時間の居残りとなる。」

②学校における停学

これは、家での謹慎がよいか、学校での謹慎（懲罰室での自習）がいいか選択できるようになっている。

学校での謹慎（懲罰室）のルール

- 1) 静かにしていなければいけない。
- 2) 両足はきちんと机の中に入れていなければいけない。
- 3) 話すときは許可を得なければいけない。
- 4) 言われたことは何をおいてもしなければならない。
- 5) 気分転換は昼食時の30分だけである。
- 6) こうしたルールが守られなければ家庭謹慎になる。

なかなか厳しい懲罰室でのルールである。私もラグビー中学校にいるときこの懲罰室へ案内されたが2人の生徒が静かに反省文らしきものを書いていて、そこには担当の先生が1名ついていた。

③その他

ハンドブックの中には、学校生活における周知すべきことがいろいろと網羅されている。「学校看護婦が週ごとに訪問されること」「両親や内科医の了解があれば学校で薬がもらえること」「ロッカーの使い方について
・いつも鍵をしておきなさい。・お金や貴重品を入れ

ておかないように」「教科書は学校から提供されるが、痛めたり紛失してはいけない」といったこと「緊急時以外は電話は使用しないこと」「ノートや鉛筆や教科書など必要なものをきちんと準備して授業の教室にいかなければならないこと」などが記されている。その中に、正しい学校生活の送り方が記されていた。

④正しい学校生活の過ごし方

- 1) 授業予定表、紙、ペンまたは鉛筆、その他授業に必要なものをもってきなさい。
- 2) 積極的に授業に参加しなさい。人の話をよくききなさい。ディスカッションは話を上手に分担しなさい。
- 3) 内容がわからなかったら質問しなさい。
- 4) いつの日も、教室を出る前に宿題の内容をよく理解し、やるべきことの計画を立てなさい。
- 5) 学んだことを使いなさい。それぞれの教科で学んだことを他の教科に生かしなさい。
- 6) もうこれぐらいでいいなどと満足しないでベストを尽くしなさい。
- 7) 先生に協力しなさい。

我々にとっては、もう言わなくても分かっているだろうというところまでも文章化されている。

⑤カウンセリング

「カウンセリングのプログラムは生徒中心であり、必要な時に人格形成や個人の価値や個人的援助を受ける権利の基になっている。個人的なカウンセリングに加えて、生徒は9週間（1学期）の間に申し込まれた特別な課題か、小さなグループの中で興味あるものを選択することができる。カウンセリングの目的は、それぞれの生徒を精神的に、感情的に、社会的に最高のレベルに成長させることにある。」

カウンセリングのやり方はよく分からないが、日本におけるカウンセリングと目的がだいぶ違っている。日本の場合は、悩める生徒、迷える生徒に対して精神的な援助や相談をすることが主になっているように思う。

⑥フィールドトリップ（FT）

「フィールドトリップはラグビー中学校における特権である。生徒は、きちんとした服装をし、規則に従って行動しなければならない。FTの参加者は、学校外の規則や優秀生徒の規則にも従わなければならない。FTにおける必需品のもっと多くの情報は8月に家庭に送られるでしょう。」

選ばれた優秀な生徒は、フィールドトリップという小旅行に参加できる特権があるようだ。どのように優秀な生徒なのか、何人くらいが該当するのか分からないがおもしろい企画である。しかし、日本においては考えにくい企画であろう。そういえば、訪問期間中に特別クラス（優秀生徒：12名）の授業を見せてもらった。担当教師とあるテーマに沿ってのディスカッションであったが相当に内容は濃かったように思う。

このあと部活動の紹介が続くが割愛する。

5 ラグビー中学校の行動の規則

「ラグビーミッドルスクールは正しい判断を下したり、自分の行いに責任をもてる市民の育成を担っている。我々の目標は生徒の行いを修正できるような機会を与えてやることにある。同じようなレベルの非行については同じような結果を与えてやるのがフェアである。」と言うことで、I～IVまでの非行の程度が示されておりそれぞれについての罰則が示されていた。

レベルIでは

- 「A. 人を騙したり、嘘をつく行為
- B. 教室を混乱させる行為
- C. 学校の備品を壊す行為
- D. 乱暴な行為
- ⋮
- K. 盗み（5ドル以下）」

5ドル以下の盗みと言うのもおもしろいが、こうした比較的軽い違反行為については、教師によって次のような懲戒が課せられることになっている。

- ・両親への連絡
- ・カウンセリングか教師による指導
- ・言葉による叱責
- ・特別な仕事の割り当て
- ・教室での補習
- ・権利などの一時停止 など

レベルIIでは

- 「A. けんか・脅迫
- B. 挑戦的行為
- C. いじめ・おどし
- D. 文書とか絵などによるいやがらせ
- G. 盗み（5ドル以上15ドル未満）」

- ・両親への連絡
- ・行動の制限
- ・停学（1～5日間）
- ・放課後の居残り
- ・権利の停止 など

途中略

レベルIV（最高のレベルになる）

- 「A. 放火
- B. 暴行
- C. 故意にアラームを鳴らす行為
- D. 酒・ドラッグ
- H. 窃盗
- I. 性的犯罪 など」
- ・保護者召喚（強制）
- ・両親への連絡（強制）
- ・法的措置
- ・停学（10日間）
- ・停学（11～180日間）
- ・精神科への紹介 など

6 さいごに

12ページに渡って学校生活の仕方について相当細かなところまで詳しく述べられていた。本校のALT（イギリス出身）に、「このような規則については、生徒はすべて理解しているのだろうか。」と、尋ねたら、「おそらく全部の内容は理解していないだろう。」ということであった。本校の、数少ない学校規則についても全部理解している生徒はいないだろうことを考えると、確かにそうだろうと思う。法律そのものがそういった性格のものであるように思う。事が起こったときいかに対応するかである。その対応は、平等であり、双方が納得する対応でなければならない。そうなるこのように詳細な規則が必要になるのだろう。

日本の場合はどうだろう。「華美でないもの」「中学生らしい行動」などファジーな表現も多い。

「…してはいけない。」といった規則はあるが、罰則規定は文章化されていない場合が多い。「人見て法を説け。」の世界である。

以上のように学校規則についても日本らしさ、アメリカらしさは確かにあった。私は、アメリカらしさを知った上で日本的にいきたいと考える。

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2002年8月16日 - 8月29日)

鳴門県立鳴門高等学校 教諭 渡邊敏夫

8月16日 (金)

12:55 高速鳴門発、大阪行き的高速バスでJR大阪駅へ。そこから電車で新大阪駅に移動し、新大阪コロナホテルに16:00ごろ到着。ディレクターの米川英樹教授他、大阪、広島、鳴門各地区からの参加者、コーディネーターが全員集まって17:00より19:00まで会議。内容は日程確認の他、参加者の自己紹介、研修計画など。この後、新大阪駅地下街で夕食。偶然にも大阪地区のメンバーと同じ店になる。

8月17日 (土)

9:30~11:30 会議。内容はノースカロライナ州の自然、気候、産業、教育事情、報告書の書き方など。特に教育事情については、最近、州知事の方針で教育に力を入れてきたことやその内容についても説明があり、予備知識として有意義であった。1996年からのABC教育改革プランについては日本も学ぶべき点が多いと思われる。

11:30 解散して、電車で関西国際空港へ向かう。15:20 関空搭乗ゲート前集合。荷物の検査。ここで、相手の学校で実験する際にガスバーナーが使えない場合のために用意したキャンプ用ガスボンベが検査にひっかかった。機内に持ち込めないということで空港預かりとなった。

16:25 ノースウエスト航空にて離日。現地時間14:55 デトロイト空港着。17:15 デトロイト発。18:55 シャーロット空港着。20:00 シャーロット空港で Dr. Dixie McGinty と Dr. Miles McGinty 夫妻の出迎えを受け、二人の車に分乗して WCU (ウェスタンカロライナ大学) へ向かう。途中ファーストフード店で夕食をとり、いねむりしつつ長時間のドライブを経て WCU の Madison Hall に着いたのは夜中の 0 時を過ぎていた。ここで Dr. Lois Mwaniki と WCU で日本語を教えながら大学院で学んでいる谷口敬一郎さんの出迎えを受けた。

8月18日 (日)

8:30 ブラウンカフェテリアで朝食。9:30より打

ち合わせ。10:30よりデキシー夫妻といっしょにブルーリッジパークウェイのグレイヤードフィールドヘサンドイッチを持ってハイキングに出かけた。そこにはなだらかで大きな滝があり、喜多先生、小川先生、デキシーさんの3人は滝つぼで少し泳いだ。雨が降るかもしれないということで早めにそこを切り上げて、昔の駅で現在はホテル兼みやげ物屋になっている建物に向かった。15:30 マディソンホールへ帰着。その後 WCU のブックストアで T シャツ等の買い物をした。17:30より18:00まで19日夕方にあるレセプションでの出し物の練習をした。

元 WCU 教授の Dr. Penny Smith さん宅での持ち寄りパーティに招待され、18:30より20:00まで歓談した。ここでスモキーマウンテン高校の化学の教師であり、後にお世話になる Mrs. Bobby Henderson に会った。学校で滞在中に実験を予定していることなど授業計画について概略を説明し、快諾を得た。

8月19日 (月)

7:45 マディソンホール出発。8:00 Cullowhee Valley Elementary School に到着。生徒や先生方に日本の着物姿で出迎えられた。その後 media center で PTA によって用意された朝食をいただいた。学校の概要について説明を受けた後、8:45から体育館で歓迎行事。体育館に階段式のイスが出され、保護者も大勢見に来ていた。最初に小さなアメリカの国旗を持った子ども達が入場し、その国旗を裏返すと日本の国旗が現れたときには少し感動した。外国で日本の国旗をみると感慨深い。その後いろいろな民族衣装と音楽の出し物があった。子ども達はよく練習しており、踊りも上手であった。インディアンの踊りと阿波踊りには私達も参加して踊った。このような歓迎行事をしてくれたことは大変うれしく感動的であった。9:30から10:00まで学校内施設の見学。10:00から11:30まで授業見学。11:45からカフェテリアで昼食。子ども達も先生に引率されクラスごとに食べに来ていた。

12:45 Smoky Mountain High School へ出発。13:

00から15:30まで校長のMr. Ken Nicholsonの案内で校内の施設見学をし、その後概要説明をしていただいた。中学3年(grade9)から高校3年(grade12)までの4年制であり、生徒は全部で930名。進学をめざす普通コースの他に職業コースもあるとのこと。カリキュラム等についてもくわしく説明していただいた。

15:45 North Carolina Center for the Advancement of Teaching (NCCAT) に向かう。16:00~17:00までNCCATで施設の見学と概要説明。17:00よりNCCATの庭でDr. Mary Kay Cooleyのお世話により picnic supperをいただいた。18:30 NCCATのホールにおいて歓迎レセプションが開かれた。ここにはお世話して下さる大学関係者や滞在する予定の学校のコンタクトパーソン、通訳の方など関係する方々が一堂に集まった。軽食をとりながら自己紹介や今後の予定やらを交えて歓談した。最後に鳴門チームはお礼の出し物として、阿部校長先生による尺八の演奏および全員で小川先生他振り付けによる「いい湯だな」を歌った。

20:00 Hendersonville 地区へ移動する小野、阿部、吉成、小浜各先生と中鶴さんとはここで別れて、マディソンホールへ帰った。

8月20日(火)

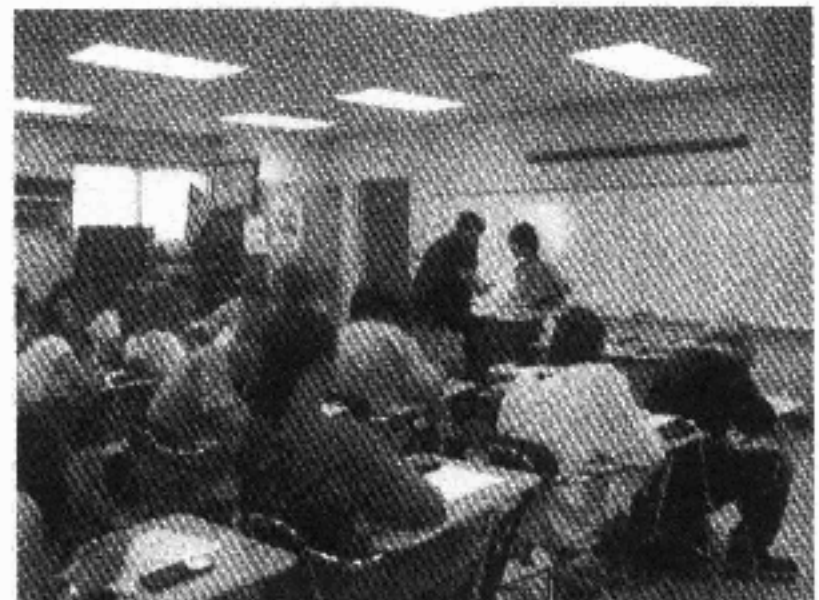
7:00 スモーキーマウンテン高校の歴史の教師であり、今回のプログラムのコンタクトパーソンであるMr. Mike Pendergastがマディソンホールへ迎えに来てくれた。アメリカではサマータイム制をとっており、1時間早くしているから、実際には朝の6:00ということになり、かなり早い。学校へ行く途中も霧が出ていたりしてまだ夜が明けきらない感じがする。教員の勤務時間は7:45 a.m. から3:15 p.m. であり、1st Period(1時間目)は8:11から始まる。90分授業で午前中2こま、午後2こまの授業がある。授業の間の休み時間はわずか6分。教員も生徒もかなりハードである。ただし、教員は1こまはplanningとして空き時間があり、単位制なので生徒は4こま全部授業をとっているわけではない。金曜日までの4日間この高校に滞在し、授業見学や交流授業をすることになる。1st PeriodはEarth Science、2nd PeriodはU. S. Historyの授業をそれぞれ見学した。英語が十分理解できないが雰囲気や授業のやり方はわかった。3rd Periodはカフェテリアで昼食を購入し(実際はペンダーガストさんのおごり)、

教員の休憩室でペンダーガストさんといっしょに食べた。その後、化学の教師で、やはりコンタクトパーソンであるボビーさんの案内で通訳に来てくれている谷口さんと一緒に再度学校全体の見学をした。4th PeriodはITV(双方向TV授業)システムとメディアセンターの見学をし、説明もしていただいた。15:30から16:40まで、すぐとなりのフェアビュー小学校に滞在している小川先生や通訳の人と一緒にサッカー、アメリカンフットボール、チアリーダー、マーチングバンド、バレーボールなどクラブ活動やスポーツ関連施設の見学をした。その後ボビーさんにマディソンホールへ車で送ってもらった。

WCUの構内にあるDodson Cafeteriaで夕食をとり、19:30よりマディソンホールで喜多、小川、川村各先生にWCUのロイスさんを交えてリフレクションを行った。ここでは訪問した各学校の様子と各自の行動や感想などを述べあった。21:00過ぎにこれを終えた。

8月21日(水)

前日と同じく7:00 a.m. にペンダーガストさんにpick upしてもらってスモーキーマウンテン高校に行った。生徒達も7:30ぐらいから来ている。ペンダーガストさんは自分の教室にはいると、机を整理し、黒板に予定など必要事項をかく。生徒が来るたびに Good morning、How are you? と気安く声をかける。1st PeriodはSeniorのEnglish 4とN. C. Wildlifeの授業を、2nd PeriodはAP(能力が高い生徒向け)のCalculus(微積分)を見学した。3rd Periodはペンダーガストさんの授業であるU. S. Historyの時間の前半に約40分間鳴門高校の学校紹介のビデオ(自作のもの)を見もらった。その後少し生徒の質問があり、これに答えた。



Chemistryの授業風景



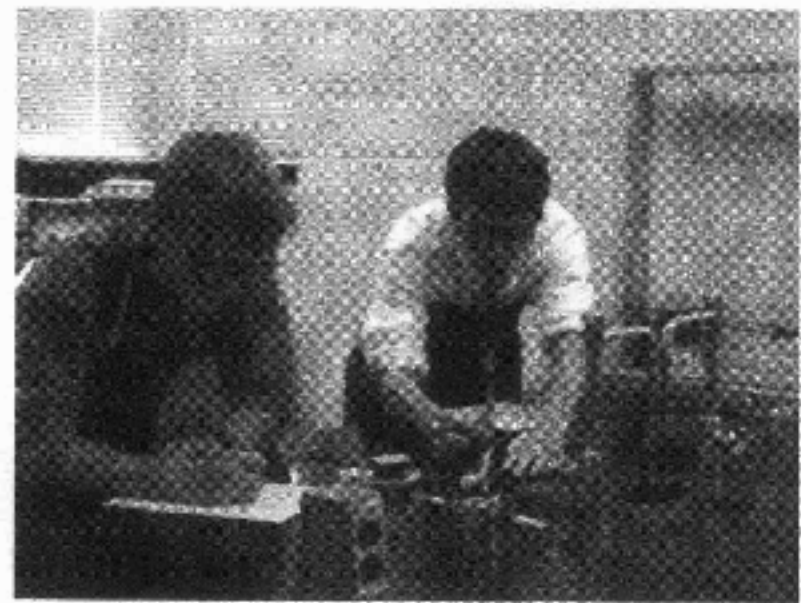
U. S. Histryの授業風景

生徒の一人(男子)に自分の名前を漢字で書いてくれと頼まれたときは、当てはまる漢字が見つけれなくて困った。また、同じ生徒から、日本のアニメである「ドラゴンボール」のシールをもらった。日本のアニメは人気があるようだ。4th Periodは前半にポビーさんの授業であるChemistryを見学した。後半は鳴門高校の学校紹介のビデオを見てもらった。なお、この日は通訳をしてくれる予定の谷口さんが来られなくなり少し困った。

16:00に学校を出て、谷口さんと待ち合わせをして16:30から一緒にWCUのブックストアに化学の教科書を買に行った。18:30から喜多、小川、川村各先生と一緒にロイスさんに連れられて町のレストランに夕食に出かけた。そこは上が本屋だったので本も何冊か買った。夕食後マディソンホールへもどって21:00からリフレクションを行い、その日の行動や感想について述べあった。

8月22日(木)

7:00 pick up. 1st Periodは4th Periodに行く予定の木炭についての実験の準備を化学室で行った。2nd PeriodはPhysicsの授業見学。3rd Periodはfreshmanに対するSuccess Prepの授業見学。ここでは日本の高校生活その他についていろいろ質問された。この日は午後から谷口さんがいてくれたので通訳してもらうことができた。4th Periodはいよいよ木炭についての実験を行った。燃料としてあるいはそれ以外の用途にも木炭の利用が今なお続いている日本文化の紹介を兼ねた実験である。あらかじめ日本で英訳して用意してきたハンドアウトに従って説明し、実験を行った。実験は全員成功し、生徒も興味を持って行ってくれたよ



化学実験をする生徒

うで好評であった。その後、今回の授業の感想を書いてもらい、学校や授業に対する満足度を調べるアンケートも実施した。

通訳をしてくれる谷口さんを交えて放課後にポビーさんとペンダーガストさんに対して、成績評価や生徒の進路、教員の待遇その他さまざまな質問をしたところ、二人ともていねいに答えてくれた。

17:30からロイスさんと一緒にメキシコ料理を食べながらリフレクションを行った。マディソンホールにもどって、20:30より小川先生の部屋に谷口さんら通訳をしてくれた人達を招いてビールなどを飲みながら歓談した。

8月23日(金)

7:00 pick up. 1st PeriodはペンダーガストさんのU. S. Histryの授業。この中で徳島や鳴門の紹介を行った。さらに日本文化の紹介として折り紙を折ってもらった。鶴と手裏剣を折った。ほとんどの生徒がうまく折っていた。その後鳴門の紹介ビデオを見た。2nd PeriodはMedical Science IIの授業を見学した。3rd PeriodはBiologyの授業見学。4th PeriodはペンダーガストさんのWorld Histryの授業であったが、時間をもらって徳島や鳴門の紹介をした。場所を示し、さらに徳島県のグルメブックを回覧して食べ物の紹介、また日本のおもちゃとして剣玉の紹介も行った。生徒たちは剣玉が気に入ったようで、小休止のときにそれで遊んだりしていた。その後鳴門高校の学校紹介のビデオを見てもらい、最後に前日ポビーさんのクラスで実施したのと同じアンケートを実施した。日本の高校生とメールのやりとりを望む生徒にはメールアドレスを記入してもらった。

週末であるため放課後は生徒も教員もほとんどいなくなりました。最後にお世話になったボビーさんと校長の Mr. Kenneth Nicholson にお礼を述べてスモーキーマウンテン高校を後にしました。

ベンダーガストさんの車で彼の自宅に送ってもらった。25日(日)の朝まで彼の家でホームステイをすることになる。16:30頃到着。家は少し山に入った坂の上であり、木に囲まれ静かで景色のよい場所にあった。現在改築中ということで、今後の改築計画の説明とともに部屋や家の周囲の案内をしてくれた。家の中で飼っているペットの犬は人なつっこく、よくじゃれついてきた。その後、自室で休憩するうちいねむりをしていった。19:30より彼の奥さん(同じスモーキーマウンテン高校で英語の教師をしている)と大学生の次男とともに4人で夕食を食べた。写真を見ながら家族の話、さらにイチローの話などもしながら奥さん手作りのビーフストロガノフ?を食べた。21:30から少しTVを見た後、入浴、就寝。

8月24日(土)

8:30起床。9:00朝食。メニューはビスケットと呼ばれるパンとスクランブルエッグなど。10:00から外出予定だったが、都合で遅れて11:00出発。グレートスモーキーマウンテンへ向かう。途中ブルーリッジパークウェイを越えて、アメリカの200年前の家を保存した公園に立ち寄った。観光客も多く、案内ガイドが説明していた。昔の農家の建物をのぞいたりしながら少し散策した。小川も流れていてきれいな場所であった。その後、車で近くのキャンプ場にも寄ってみた。森の中にあり、信州や北海道の霧囲気に似ていた。さらに目的地に向けて走ったが、ガソリンを入れるために少し引き返してチェロキーに行くことになった。アメリカインディアンの居留地であり観光地である。あらためてスモーキーマウンテンまで行くにはかなり時間がかかりそうだったので、チェロキーでおみやげのTシャツなどを買い、帰ることにした。途中ウォルマートで買い物をした後、16:30ベンダーガストさん宅に戻った。

17:00から彼が飼っている鷹の訓練風景を見せてもらった。20:00夕食。彼と奥さんと私の3人でバーベキュードチキンをテラスでいただいた。英語に苦勞しながらも電子辞書の助けを借りつつ、23:00まで食べ

物や日米の生徒の違いなどいろいろな話をすることができた。入浴、荷物の整理などして0:30就寝。

8月25日(日)

7:30朝食。ベンダーガストさんと彼の奥さんにお礼と別れのあいさつをした後、マディソンホールに送ってもらった。8:30州都Raleighに向けて出発。マリーさんの運転で長距離ドライブとなる。12:30にパイキング形式の昼食をとった後、15:30頃、ラレーの宿泊予定のホテルHoliday inn Brownstone Hotelに到着。ビールなどを少しいただきながら休憩。17:00から18:20まで喜多先生の部屋でサマリーミーティングの件について打ち合わせ。18:30から近くのレストランで夕食。この後、WCU 地区から送って来てくれた先生方とお別れした。20:20からサマリー用の原稿づくり。できた人から喜多先生の部屋のパソコンにパワーポイントで入力していった。私は午前3時過ぎに自室に戻ったが、全員の原稿を入力するのに朝の5時ごろまでかかったという。

8月26日(月)

8:00ホテルを出発。9:00より博物館 Exploris 内のホールで大阪チーム、広島チームおよびアメリカ側関係者を含む全体でのSummary Conference。各代表者のあいさつの後、いよいよ発表。鳴門チームは一人一人が自分の行動や観察したことをまとめて述べていった。発表は無事終了。12:00に会場で昼食をとり、その後いくつかのPresentaionを聞く。今回新たに姉妹校を結んだ学校が2校あり、その締結のセレモニーもあった。15:30頃終了。ホテルに帰り16:00より近くのショッピングモールへ買い物に出かける。19:00より日本食レストラン「歓喜」で大阪チームと一緒に夕食。すしや鉄板焼きなどを食べた。21:00頃夕食を終え、ホテルに帰った。

8月27日(火)

7:30にホテルの近くの店で朝食をとり、8:45ホテルを出発してExploris博物館立Middle School訪問。生徒の案内でいろいろな授業と施設を見学。10:40から12:00まで隣のExploris博物館を見学。その後近くのレストランで昼食を食べた後、移動して13:20から14:45まで州立科学博物館を見学。入場無料であるが

大きな恐竜の模型の展示などもあり内容は大変よかった。15:00から16:00までノースカロライナ州教育委員会を訪問。施設の見学や仕事の概要などの説明をうけた。16:15ホテルに帰り、17:00より再び昨日のモールと近くの本屋およびおもちゃ屋トイザラスに出かけた。19:45モール内で簡単な夕食をとり、21:15ホテルに戻った。荷物の整理をして就寝。

8月28日(水)

4:20起床。5:00チェックアウトしようとしたら国際電話の代金が異常に高く、調べてもらったが埒があかない。日本の自宅へ数分の電話を2回しただけなのに数時間電話したことになっている。受話器がきちんと降りてなかったか電話機の誤操作の可能性という。米川先生がかなり交渉してくれたがどうにもならないという。高い教育費についてしまった。なお、これに関して同行したGPSPのメンバーからたくさんのカンパをいただいた。また、後日ディレクターのDr. Donald Spenceが多量なる尽力をして交渉していただいた結果、余分の電話代は返還され、この問題は解決することになった。改めてお礼を申し上げます。

6:30ホテル出発、ラレー空港に向かった。空港では荷物が重すぎて中身の入れ替えをしなければならないなどまたまた手間取った。9:05ラレー空港発。10:45デトロイト空港着。12:05デトロイト空港から日本に向けて出発。

8月29日(木)

日本時間15:00(現地時間2:00)関西国際空港着。預けてあったキャンプ用ガスボンベを受け取って、16:00過ぎの徳島行き高速バスで帰途についた。

(追加) 授業見学および授業実践報告

(1) Cullowhee Valley Elementary School

幼稚園から中学2年(grade 8)まで1クラス最大27人で各学年平均して3クラス(2~4クラス)があり、計650人の子どもが通う。障害児クラスが2クラスある。英才児のためのクラスも4年生からあり、毎日1時間Readingのみ取り出し授業を行う。8年生のみ数学の英才児用授業を行う。普通の授業は60~90分授業。黒人の割合はかなり少ない。障害児用のトイレもある。昼食時には生徒は時間を分けてクラスごとにカフェテリアに規律正しく入って昼食をとっていた。昼休み、図書室では教師が低学年20名くらいを床にすわらせて絵本の読み聞かせをしていた。

①6年生 数学(Math)

生徒は約20名。OHPを使ってすわったまま授業を行う。教師は一人一人に対応し、ほとんどの生徒は集中して取り組んでいる。プリントを使っての授業で、教師の発問に対しては手を挙げて答えていた。内容は時刻の間隔を問うものとなり算やかけ算が混じった足し算。まず自分で計算させてから電卓も使用していた。教科書は大きく厚い。

②1年生

生徒は23名。教室には大きな机が5つあり、いろいろな教材がおいてある。絵本も30冊程度おいてあり、手洗いもある。教室の壁にはカラフルなかざりつけ。大きなホワイトボードと大きなテレビ、パソコンがある。子どもたちは床にすわり、教師もイスにすわってゆっくりとした話し方で授業。内容は数字の読み方と絵本の下の方を読むこと。教師の指さすところをみんな読んでいく。質問に対しては多くの子ども達が手を挙げて答えていた。

③4年生 国語(language)

生徒は18名。教師は2人いて、一人が全体に指導し、もう一人はおくれがちな生徒を教室内の別の机に移動させて指導。3人の子どもが別に指導を受けていた。生徒はノートに書き取りをする。できたものは手を挙げる。教師は机間巡視により一人一人指導していた。

(2) スモーキーマウンテン高校

中学3年 (grade 9) から高校3年 (grade 12) まで順にそれぞれ206, 280, 224, 185名で計895名の生徒が在籍する。100名の職員のうち、70名が教員として授業を教える。公立学校なので入学試験はない。希望者は全員受け入れるとのこと。単位制の総合高校であり、大学などへの進学をめざす普通コースと就職をめざす職業コースなどがある。

職業コースでは、実際に土地を買って生徒が家を建て、これを売ってまた次の家を建てる資金にするなど実際の仕事にすぐに役立つ授業がなされている。生徒の40~50%は大学へ進学する。ガイダンス指導をきちんとおこなっており、どういう授業が進学に必要なか、どういう授業をとればコミュニカレッジ (2年制であり、大学の3年への編入も可能) の授業として認められるか、どの授業をとればどういう職業に就けるかなどを詳しく記載したガイドブックを入学前の春から渡しておく。入学後春と秋にガイダンスカウンセラーと相談し、親の承認を得てコースやとる授業を決める。専任のガイダンス指導の職員3名とソーシャルワーカー1名がおり、スクールサイコロジストが毎週火曜日に学校へ来る。看護婦の資格を持つ医療関係教員が2名おり、1人は緊急時に対応する。日本のような養護教員はいない。

生徒は15才で運転許可証 (親が同乗している必要あり) がとれ、16才で正式の免許証がとれる。このため車が運転できるようになると生徒は車で通学する。それまでは親に送ってもらうかスクールバスで来る。現在250名は自分で運転、200名はスクールバス、残りは親が送ってきている。安全対策として学校へは毎日シェリフが巡回に来る。生徒指導に関しては、入学時に配布するハンドブックに、服装の規定やどういうことをすればどういうペナルティーがあるかを記載してある。学校の年間スケジュールや生徒が参加できるクラブ活動の説明もある。同時に渡すガイドブックには授業に関する規定が記載されており、進級や卒業に必要な単位数、成績をつけるときの基準なども詳しく説明されている。例えば、授業は90分授業であり、90日として1単位となる。4年間で32単位とれば卒業できる。学校の予算は州から65%、郡から20%、政府から15%出されている。

なお、今年からフレッシュマンフレームワークとい



生徒が授業で建築中の家

うのを実施している。これは1年生全員に対して、学習スキルや責任感の欠如を指導するために英、数、理、社の教員3人ずつ計12人でチームをつくり、授業を選択するメンバーが同じになるようにして、欠けているスキルを身につけさせようとするプログラムであり、学級担任制的な要素を加えようとしている。

8月20日 (火)

1限目 Earth Science Mrs. Yurokovich担当
9年生

(観察した内容)

生徒は20名。教室は本来Chemistry roomであるとのことで生徒用の机やイスの後ろや横に実験台が6つある。机は4人用でイスはない。ドラフトや緊急用シャワー、保護めがね、TVがある。教室の壁にはアインシュタインの写真や実験の際に注意すべきこと、地質図などさまざまな張り紙があり、岩石標本もたくさん置いてある。授業の内容は同位体や化合物に関すること。授業の途中で実験が入り、生徒は実験台に移動。二人一組で実験を行う。内容は花崗岩とそれを粉碎したものをルーベを使って観察するものであった。実験が終わるとまた元の机に戻り、結果を述べたり、授業の続きを受ける。

(内容の考察)

90分授業でありながら、生徒は集中して聞いていた。教師は途中で実験を入れるなど生徒が飽きないように工夫もしていたし、生徒一人一人に話しかけるようなしゃべり方をしていたのが印象に残った。教室の横と後ろにある実験台は日本のものよりやや狭いが、講義を聞いた後すぐ移動して実験できるなど機能的である。実験を二人一組でやるのは興味もわくし能率がよいと思

われた。教室の壁にいろいろな張り紙をしてあったり、標本をおいてあるのも興味や注意をひくのに有効だと思われた。

2 限目 American History 11年生 (High level class)

Mr. Jake Buchanan 担当

(観察した内容)

生徒は19名。内容は独立戦争と独立宣言について。最初にTVを約10分間視聴。その後、授業はパソコンを利用して進める。プロジェクターにつないだパソコンからスクリーンに板書すべき内容が映し出される。ソフトはパワーポイントに似たものを使い、画像も映し出す。スクリーンはタッチパネルで教師が指でさわると画面が変わる。生徒はその内容をノートに写す。説明の後、生徒が手を挙げて質問したり意見を述べる。私語をするものは全くいない。約1時間で小休止。生徒は部屋を出たりしてくつろぐ。その後、4~5名でグループになり、教科書を使ってこの章の内容についてブレインストーミング。生徒数名は帽子をかぶったまま授業を受け、机の上にはミネラルウォーター。ガムをかんでいる生徒もいる。教室の周りの壁には歴史上の人物や地図がたくさんはられ、本が並べられている。

(内容の考察)

パソコンとプロジェクターを使った授業は機能的で効率がよいと思われる。教師は板書する手間と時間を節約でき、画像も映し出せるので見た目にも美しい。しかも何度でも同じ内容の授業にそのまま使える。文字も見やすく内容は整理されており、生徒もノートに写すのに都合がよい。あらかじめ準備が必要だが、提示内容はうまく構成されており、教師の指導力も優れていると思われた。教室環境も歴史に興味を持たせるのに適していると思われる。身なりや態度は別にして生徒の授業に対する取り組みは真剣であると思われた。

4 限目 (前半) ITV (interactive TV)

ITVを利用した授業は行われていなかったため、担当の方から説明を受け、他校での実際の利用して様子を見学した。これは約60km離れた4つの教室を結んでおり、一つの学校の教師が教えて、他校の生徒もITVを通して授業を受けることができる。選択者数が少なくその学校では開講できなかった授業やレベルの高

い特別な授業などを受けることができる。教室の前と後ろにそれぞれ4つのモニターがあり、カメラは3つある。カメラの一つは生徒、一つは教師、残りの一つは教材を映し、自由に操作できる。ビデオも流すことができる。教室には生徒は15名くらい入ることができるが、他校の教師がITVを通して指導するときは5名くらいがよいとのこと。

4 限目 (後半) Honor's Chemistry

Mrs. Bobbie Henderson 担当

(観察内容)

生徒は20名。男女ほぼ同数。関数電卓を使って2枚のプリントの問題を解く。わからないものは教師に質問に行く。教師は合間にホワイトボードに追加の質問事項をかく。板書内容は下記に示したとおり。トイレに行く生徒は日本語で「お手洗い」と書いた木札を持って黙って出ていく。問題ができた生徒は前を出してくる。

板書内容

You will be given a sample of material.	
Question(s)	Substance or Mixture?
	If more than 1 substance or mixture of ≥ 2 substances, how can you separate and recover all components?
List properties	
	possible order of "separate methods"
Equipment needed	

(内容の考察)

授業中に電卓を使って問題を解くのは日本でも行ってよいと思う。計算自体に時間がかかるよりはその方が効率がよい。板書内容からわかるように出された問題は実感的であり、生徒に考えさせる良問であると思われる。日本では大学入試に向けた断片的な知識だけを問う問題が多いので、こうした問題は考える力をつけるのに適していると思う。

8月21日(水)

1限目(前半) w.c.u. English Mrs. Peston 担当
12年生

(観察内容)

seniorクラス。24名。机の配置は教師を中心にコの字形になっている。生徒全員が教師の方に注目しており、教師の発問に対しては多くの生徒が口々に答える。教師は大きな身ぶりで話し、生徒の興味をそらさないようにしている。途中でOHPに映した問題をさせたり、色画用紙を使って説明したりした。2~3名の生徒は授業中に飲み物を飲んでた。

(内容の考察)

教師が、生徒の注意や興味をそらさないよう大きな身ぶりや動きで授業をしているのが印象に残った。生徒は飲み物を飲むなどリラックスした態度だが、授業に対しては集中して取り組んでいる様子が見て取れた。

1限目(後半) N. C. Wild life Mr. Bryson 担当

(観察内容)

23名。ノースカロライナの野生に関するもの。この日はトラウト(マス)についての授業。生徒は二人ずつすわり、教師は前で大きく動きながら話をする。途中で実際に一人一人に釣り糸に釣り針をつけさせていた。教室の壁にはいたるところ野生生物などの写真がはられていた。

(内容の考察)

地元の野生生物について学ぶことができるのはすばらしいと思う。実際に釣り針をつけさせるのも興味を持たせるのに適している。教室環境も写真が多くて大変良いと思われた。

2限目 AP Calculus Mr. Parker 担当

(観察内容)

生徒は19名。Collegeレベルの微積分。最初に宿題について確認。教室の前にはホワイトボードとその手前に巻き上げ式のスクリーンがあった。授業はホワイトボードを使ったり、パソコンにつないだプロジェクターなどを使って行っていた。問題はグラフ電卓を用いて生徒に解かしていた。教師のグラフ電卓はOHP上の装置につながり、電卓での計算結果やグラフをスクリーンに映し出すことができる。コンピュータからその教材に関するアニメーション入りの解説ビデオを流しな

がら授業を進めていた。

(内容の考察)

プロジェクターやグラフ電卓、ビデオなどをうまく使って効率よく授業を進めていた。さすがに優秀な生徒向けのスマートな授業であり、教材もよく準備されていると思われた。教師の力量が優れていると感じられた。

3限目 American History Mr. Pendergast 担当

(内容)

生徒は12名。最初の40分間は日本から持ってきた自作の鳴門高校の紹介ビデオを見てもらった。徳島県や鳴門市について絵はがきを見せながら少し説明した。その後生徒から少し質問があった。生徒の一人が日本のマンガ「ドラゴンボール」のシールをくれた。また、自分の名前を漢字で書いてくれと頼まれた。書くには書いたが、あまりいい漢字が見つからず少し申し訳ないことをした。最後には絵はがきを一人一枚ずつプレゼントした。

後半はMr. PendergastのGulf War(湾岸戦争)に関する授業。しかし、Mr. Pendergastは体調を崩しており、生徒に次のことを調べてくるよう指示して授業を終えた。Diseases of Gulf War, Desert Shield, Women in Combat。

(考察)

アメリカの一部の高校生には日本のマンガは人気があるのかなと思った。マンガにより日本に興味を持ってくれたらそれもよいことだ。アメリカの歴史の授業は湾岸戦争やパレスチナ問題など現代的な内容を取り上げ、いろいろ調べさせたり考えさせるようである。歴史の授業のあり方としてはこの方が望ましいと思われた。日本のように昔のことばかりに時間をとられ、しかも暗記中心で現代史の問題にあまり重きを置いていないのではその意義が薄れると思われた。

4限目 Honor's Chemistry

Mrs. Bobbie Henderson 担当

10年生3名、11年生13名、12年生3名。

(観察内容)

生徒は19名。ガスバーナーの使い方などLABORATORY TECHNIQUESに関するもの。教師がプリントを使ってあらかじめ説明した後、教室の後ろおよび横

にある実験台に移動してガスバーナーの使い方を二人一組で行った。保護眼鏡と前掛けを必ず着用して行う。火をつけるにはマッチを使わず、ライターの石だけ着いたような器具を使う。最初、空気を十分加えないで燃焼させると赤い炎になったが、そのまま小さな蒸発皿に水を少し入れたものを直接つぼばさみではさんで加熱させた。蒸発皿の底はススで真っ黒になり、蒸発皿が割れた班もあった。その後、空気を十分加えて青い炎にして加熱させた。

残り約30分は、鳴門高校の学校紹介のビデオを見てもらった。時間がなくて質問を受けることはできなかった。

(内容の考察)

ガスバーナーの使い方について説明する際、私なら最初から空気を入れて青い炎になるように指導するところだが、ボビーさんは最初わざと誤った方法で生徒にやらせ、その結果がどうなるかをわからせた上で正しい使い方を説明していた。このやり方は確かに大変有効であると思われた。教師にゆとりがあるように思われた。また、教師の真剣な態度に対応して生徒の真剣な取り組みにも感心した。マッチの代わりにライターの石だけついたような器具を使うのは安全であるし便利だと思った。

8月22日(木)

1限目 4限目の化学実験のための準備。

2限目 Physics Mr. Frizzel担当

(観察内容の記録)

生徒は8名。変位と座標に関する内容。板書の例として次のような記述。[walk west 2miles stop walk 3 miles north] 教師は生徒一人一人に話しかけながら、答えを引き出す。ペースはゆっくりしている。生徒は集中して聞いている。

(内容の考察)

生徒が少なくいためかゆったりとした授業で、一人一人がわかるのを確認しながら進めているように見えた。ペースは遅いのであまり進学に必要な生徒が対象なのかもしれない。それでも態度は真剣であった。

3限目 Success Prep Mrs. Yurkovich 担当

9年生

(内容の観察)

生徒は25名。新入生のためのガイダンスおよび進路HRみたいなもの。MITテスト(適正検査のようなもの?)というものを実施。アシスタントが一人ついていて。生徒はみんな真剣な態度で取り組んでいた。板書内容は次のとおり。

Goals ←	Campus Pride
Why?	Fantasy
Why not?	Ready
What makes it good? —	Aim
	Method
	Evaluate

It's easy to be pleasant
when everything goes like a sing.
but the man who is worthwhile
to the man who can smile when
everything goes wrong.

最後の20分くらいは、日本の高校の紹介をしたり、質問を受けたりした。鳴門教育大の喜多先生も日本の大学のことを紹介した。

(内容の考察)

日本では進路HRはクラス担任が行うが、アメリカのような方式、すなわちこの授業やガイダンス専任の職員が指導するというやりの方が豊富で専門的な知識を得ることができ有効かもしれない。板書の内容は示唆に富み、感心させられた。なお、生徒の質問に対しては通訳をしてくれた谷口さんのおかげで何とか対応することができた。

4限目 Honor's Chemistry

Mrs. Bobbie Henderson 担当

(授業をさせてもらった)

(内容)

日本文化の紹介を兼ねて化学の実験をしようと考え、「木炭に関する実験」を行った。あらかじめ日本から実験用のハンドアウトを作っていたのでこれに従って説明した。日本では現在でも木炭を使用していることは焼き鳥やウナギの蒲焼きをしている写真の入った雑誌を見せて示した。実験内容は次の通り。

①割り箸から木炭をつくる。

②できた木炭を粉碎して、色素を吸着する能力について調べる。

③備長炭電池を作って、ソーラーモーターを回したり、電子メロディを鳴らす。

生徒は熱心に実験を行い、ボビーさんの指導もあって全員がうまくやり遂げることができた。ただし、割り箸から木炭を作る際に煙が大量に発生して周辺の教室に迷惑をかけたようだ。実験後、感想を書いてもらったところ、大変興味深く楽しかったという感想が多かった。学校やボビーさんの授業に関するアンケートにも答えてもらった。

(考察)

ボビーさんが適切な援助をしてくれたおかげで好評のうちに授業を終えることができた。生徒が熱心で興味深く取り組んでくれているのも大変嬉しかった。この授業を英語でしなければならないことがずっと重荷で不安だっただけにほっとした。この授業をとっている生徒は優秀な生徒らしく、人数も多くなかったので指導しやすかったということもあると思われる。やはり日本でもアメリカでも生徒が実験好きなのは同じであり、適切に実験を取り入れれば理科に対する興味をさらに増すことができると改めて思った。

8月23日(金)

1限目 American History

Mr. Mike Pendergast 担当

11年生

(内容)

ホワイトボードの横の方に授業の流れのプランを簡潔に示してある。最初にペンダーガストさんがそれを説明する。その日の授業は私がお願いして、折り紙の紹介をさせてもらうことにした。日本から持ってきていた折り紙の折り方の部分を一部コピーしてもらい生徒に配布。私が説明を交えながら、鶴と手裏剣を折ってもらった。折り紙について知っている生徒もかなりいて、折り方の図を見ながらほぼ全員がなんとか鶴を折ることができた。手裏剣もみんなうまく折っていた。

(考察)

ペンダーガストさんが折り鶴について、広島の子供の話をして説明していたのが印象に残った。私自身は佐々木禎子のことを知らず、帰国して偶然テレビ

を見て知ったもので日本人として少しはすかしい思いをした。

2限目前半 Medical Science II Mr. Hodde担当

(観察内容)

生徒は3名。看護に関する授業。教員は机の上に座って3人に話しかける。資料は授業のたびに渡し、生徒はそれとノートを2リングファイルにとじていく。授業の合間に教科書を見ながら宿題をやらせる。生徒は大変静かに授業を聞いている。

(内容の考察)

生徒の真剣な態度が印象に残った。3名という少人数でも授業を保証しているのはさすがにアメリカである。

2限目後半 Chemistry

Mrs. Bobbie Henderson 担当

(観察内容)

生徒は15名。内容は金属の同定に関するもの。色や密度などのデータからどの金属か考えさせる。誤差や有効数字、単位の計算に関して説明していた。生徒は与えられたプリントをパンチで各自が穴を開けてノートに綴じていく。問題プリントについてはできた者から提出していく。

(内容の考察)

日本では講義中心の授業になりがちだが、ここでは考えさせる機会や時間をかなり多くとっているようである。問題を解くには関数電卓を使い、できた者から出して帰るといったやり方は効率的である。

3限目 Biology II Mrs. Corzine 担当

(観察内容)

生徒は25名。2人ずつすわる。コケやシダの生活環に関する内容。OHPでスギゴケの生活環の図を映しだし、生徒はこれを紙に写す。そこに図に該当するものを実際のスギゴケからとって自分で貼っていく。ビデオでコケに関するものを見せる。生徒は静かに見ている。教師は単なる講義だけでなく生徒にいろいろなことをさせる。生徒はよく手をあげて発表する。午後の授業であるが居眠りをしている生徒もおらず、楽しい雰囲気の中で授業を受けている。授業の最後に生徒が書いた紙を提出させる。

(内容の考察)

教師がエネルギッシュであり、授業もよく準備されていると思われた。生徒は楽しんで授業を受けているようであった。教師の力量がすぐれていると思う。

4 限目 World History Mr. Mike Pendergast 担当

(内容)

生徒は23名。最初10分程度のテストを実施。その後、私が自己紹介し、その後、四国の旅行ガイド雑誌やグ

ルメブックを回覧しながら徳島や鳴門の紹介をした。学校紹介のビデオを見てもらった後、少し質問を受けた。さらにアンケートにも答えてもらった。残りの時間はペンダーガストさんが宿題を出し、生徒はそれについて説明を聞いた。

(考察)

生徒の授業に取り組む態度がよい。教師との信頼関係が十分にできている感じがした。